火野葦平「糞尿譚」論

――その典拠『聊齋志異』「画皮」との比較――

増田周子

はじめに

火野葦平には、三つの「糞尿譚」小説が存在する。一つ目は、昭和一二年一一月一八日に『文学会議』に発表し、昭和一三年に第六回芥川賞を受賞した「糞尿譚」、二つ目は「糞尿譚[1]」として発表され、収録される際に一部「中国糞尿譚[2]」と改題された作品、三つ目は「インド糞尿譚[3]」である。いずれも、糞尿をモチーフに使った話であるが、最初の「糞尿譚」以外は、ほとんど世には知られていない。二つ目の「糞尿譚」は、中国古典文学『聊齋志異』を典拠とした作品であり、『中国艶笑風流譚』（昭和二六年一月一〇日、東京文庫）に、収められている。『中国艶笑風流譚』には、「糞尿譚」以外に七作が収められ、それらは全て『聊齋志異』に原典がある。しかし、火野葦平の『聊齋志異』関連作品は、これまでほとんど研究されてこなかった。そのほとんどが公職追放中[4]に書かれたため、発表雑誌も大衆読物雑誌が多く、とるに足らない作品として研究対象とされずに無視され続けてきたのである。公職追放中、火野は戦争という愚かな事態を引き起こしたのは一体何故かという問題に向き合った。「糞尿譚」は、戦後の平和復興を築くためのキーとなるのは何かという極めて重要なテーマとも深く関わっている。火野は、「糞尿譚」で、次のように述べている。

> 私が『糞尿譚』を書いたのは昭和十二年、あれから二十年が経っているが、この糞尿問題はなお解決されないテーマとして、いつまでもつづいている。人間が排泄するという悲しい宿命があるかぎり、永遠の問題かもしれない。[5]

火野は、糞尿物語は人間の根源にかかわる永遠のテーマだと考えていたようである。さて、本稿では、火野葦平の二つ目の「糞尿譚」という短編小説をとりあげ、火野が、原典である『聊齋志異』を元にしてどのように加筆し、新しいオリジナル作品を生成していったのか、さらに作品「糞尿譚」に込めた主題について考察していきたいと思う。なお、本稿では、初出の「糞尿譚」をテクストとして用いることにする。

一、「糞尿譚」の典拠『聊齋志異』「画皮」

「糞尿譚」の典拠は、『聊齋志異』の「画皮」である。火野葦平は、次の言説を残している。

> 早稲田文科時代、私は杜小陵と李太白との詩に惹かれて、自分も漢詩つくつたりしたことあつた。私のやうな浅学な者はたちまちそのむつかしさに辟易して、やめてしまつたが、それがきつかけとなつて、両詩人の唐本詩集とならべて、商務印書館版の「古今奇観」や「聊齋志異」を机上におくやうになつた。そして、それを漢和辞典をひきながら熱心に読み、興趣のつきざるものをおぼえたが、やはりそのむつかしさに面倒くさくなつて投げだしてしまつた。それから、後年、柴田天馬氏の名訳が出るにいたつて、さらに往年の感動を新にしたのである。柴田氏の訳文は原語をたくみに生かした実に気のきいたもので、その親切な註解とともに、昔、中途半端にしか読んでゐなかつた私をすこぶる満足させてくれた。終戦後は、北京からかへつてきた村上知行氏の訳が出版された。これはまた原文を思ひきつてくだいてしまつた平易な文章で、柴田氏とは、別個の味はひがあつた。[6]

では、火野は、「糞尿譚」を発表するにあたって、「画皮」を何の本で読んだのであろうか。火野が、読んだという商務印書館版の『聊齋志異』の第一巻に「画皮」は収載されている。また、葦平が感動したという柴田天馬訳の『聊齋志異』は、大正八年一〇月一〇日に玄文社から、『和訳聊齋志異』として発刊され、大正一五年三月一〇日には、第一書房より柴田天馬訳『聊齋志異』が刊行されている。また、柴田天馬訳『聊齋志異』は、昭和八年にも第一書房から発刊されている。火野が何を手元に置いていたのかは不明であるが、火野はこれらの柴田天馬訳の『聊齋志異』を読んだのであろう。しかし、残念ながら、そのい

ずれにも「画皮」は掲載されていない。

「糞尿譚」を昭和二五年に発表するまでに、村上知行訳『聊齋志異』は、『聊齋志異香艶抄』（昭和二二年一二月一五日、光文社）、村上知行訳『もだんらいぶらりい　聊齋志異上巻』（昭和二四年五月一五日、東西出版社）などが発刊されている。村上知行訳『もだんらいぶらりい　聊齋志異上巻』には「画皮」は収載されている。火野は、「画皮」を辞書をひきながら商務印書館版で漢文で読んだか、村上知行訳で読んだのであろう。

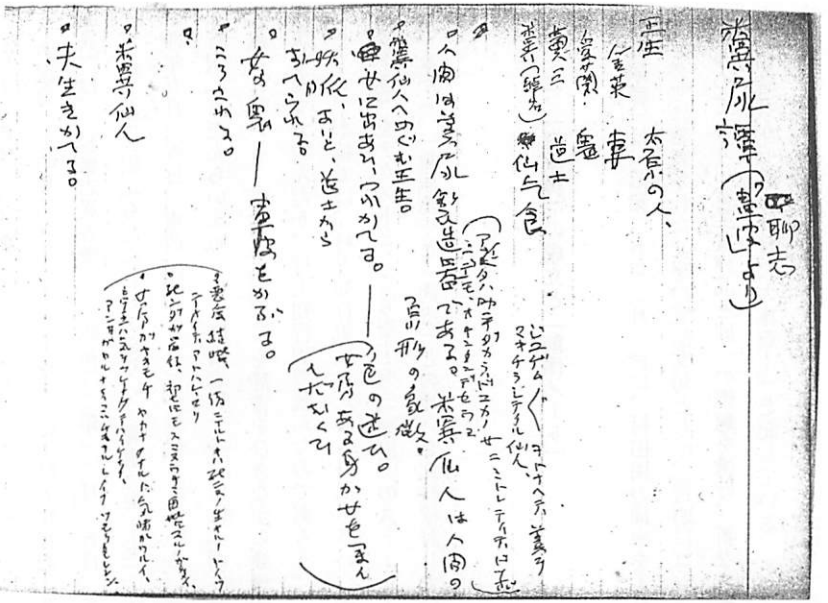
そこで、本稿では、村上知行訳『もだんらいぶらりい　聊齋志異上巻』をテクストとして考察する。「画皮」のストーリーを追いながら、「糞尿譚」と「画皮」との違いを比較検討していきたい。

二、「糞尿譚」の成立と「創作ノート」

「糞尿譚」は、昭和二五年二月一日に、村田閑の挿画を入れて『キング』に発表された。その宣伝文句として、冒頭にゴシックで「かつての芥川賞受賞作品と同一の標題を携げ、新なる構想の下に錐者が心魂を傾けた大雄篇！」と記している。その後、次の単行本に収録された。なお「中国糞尿譚」と改題して収録されている点を※で示した。

① 『中国艶笑風流譚』（昭和二六年一月一〇日、東京文庫）
② 『東洋艶笑滑稽聚』（昭和二七年五月三〇日、東京文庫）※「中国糞尿譚」と改題
③ 『美女と妖怪―私版　聊齋志異』（昭和三〇年七月一日、学風書院）
④ 『中国艶笑風流譚』（昭和三一年二月一〇日、学風書院）
⑤ 『中国艶笑物語―私版　聊齋志異』（昭和三一年三月五日、河出書房）
⑥ 『いろといのち』（昭和三三年三月三〇日、五月書房）※「中国糞尿譚」と改題

以上、六冊に収録され、二冊が「中国糞尿譚」というタイトルで掲載されている。「中国糞尿譚」と改題した際にも、ほとんど改訂は施されていない。収録するにあたって、初出にあった先の宣伝文が省かれ、初出では「一章」から「九章」となっていたのを、「一帖」から「九帖」として収録したのみである。ただし、⑥『いろといのち』では、章もない。次に「糞尿譚」の「創作ノート」を見ていきたい。火野葦平は、「糞尿譚」を執筆する際に、メモ的な「創作ノート」を記しているので、紹介してみる。



糞尿譚（聊志「画皮」より）

王生　太原の人。

金英　妻

愛蘭　鬼

黄三　道士

糞（綽名）仙乞食　ジユゲム〳〵ヲトナヘテ、糞ヲマキチラシテイル仙人。

（アンタハ助平ダカラ、ドコカノ女ニミトレテイテ、ドツボニデモ、オチンタンデセウヨ）

○人間は糞尿製造器である。糞仙人は人間の原型の象徴。

○糞仙人へめぐむ王生。

○女に出あひ、つれかへる。——（色の迷ひ。女房のある身が女をつまんだむくひ）

○妖脈、ありと、道士からあてられる。

○女の鬼——画皮をかぶる。

○ころされる。

○恋愛結婚、一緒ニナルトキハ死ヌノ生キルノトイツテオイテ、アトハケロリ

○死ンダガ最後、初七日モスマヌウチニ再婚

スルノガ多イ。
○女房ガヤキモチヤカナクナルト、気味ガワルイ、亭主ハ気ヲツケナクテハイケナイ。
アンタガヤルナラ、コツチモヤルトイフツモリカモシレン。
○糞仙人
○夫生きかへる。

以上が「創作ノート」である。創作のための重要点がまとめられているので、次章以降この「創作ノート」を用いて詳細に説明していきたい。

三、『聊齋志異』「画皮」と「糞尿譚」比較研究

a　女と王生との出会いの相違

まず、「画皮」の、王生が女を自分の家に連れてくるまでのストーリーを示してみる。太原の王生が、早朝歩いていると、女が、寂しそうな様子で歩いていた。王生が、急ぎ足で追っかけると一六歳くらいの美人であった。何を悲しんでいるのかと聞いてみると、両親がお金に目がくらみ、妾として売られたが、本妻がひどく嫉妬して叩いたり怒鳴られたりしていじめられたので、どこか遠くに逃げようとしていると言った。行く当てがないなら、自分の家に来ないかと言うと、女は喜んでついてきた。女は、自分を置いてくれるなら、誰にも秘密にしてくれるようにと頼んだ。王生は、女を書斎に置くことにし、一緒に寝ることにした。女は書斎から一歩も出なかったので、家人は数日たっても気づかなかった。王生には妻陳氏がいた。王生は、陳氏には女のことを打ち明けた。陳氏は、女が大家の妾であれば厄介なことになりそうだと、はやく出してしまうことを勧めたが王生は聞かなかった。「画皮」ではこのようにストーリーが展開する。火野の「糞尿譚」の展開も、ほぼ同様である。王生が女性と会うシーンは、「糞尿譚」では、「第一章」である。「糞尿譚」では、その女は「聊齋志異によくでてくる仙媛のなまめかしさがあつて」とあり、『聊齋志異』と関係があることが仄めかされている。また、

美女の愁嘆のさまは、快活の貌よりもさらに色つぽく、そして、煽情的ですらある。筆者に似た勤厳の愛妻家たる王生の胸に、或る妖しげなときめきがわいてきた。美形に対する憧憬は人間本然の欲求であるから、このとき、王生が

格別に浮気心を発したわけでもない。それは、王生のために、弁じておきたい。[7]

と語り手が王生の欲求についてコメントする。王生は、このあと、「糞尿譚」では、女に見惚れて石に躓いて水たまりに片足を突っ込んでしまう。水たまりに足を落とす場面は、『聊齋志異』にはない。以上のように、王生ら登場人物の心理や行動の詳細な加筆がみられることと、筆者が語り手として登場するところが、『聊齋志異』の「画皮」と異なる点である。王生は、女を助けてやるという「ヒロイズムに、興奮して、呼吸さえはずませていた」。そのような王生について語り手は次のように記す。

ヒロイズムといつたところで、結局はオポチュニズムや、エゴイズムの変形である場合が多い。助けた女が、三角顔、目くされ、菊石の色黒、出つ歯の醜女であつたならば、王生の胸も、こんなには、ときめくまい。第一、ふらふらと跡をつけるようなこともすまいから、女は投身を完了して、翌日は土左衛門となつて発見されるのが落ちである。[8]

語り手はこのように人間の心理を穿ったコメントをする。語り手の役割は重要なので、次節以降もとりあげて説明してみたい。

b　糞狂との出会い

火野の「糞尿譚」の「第一章」には、かなりの分量で王生と妻金英の結婚のいきさつが記される。王生は、三二歳、風采も立派で、温和で人々から愛される人物だった。妻金英と王生は、恋愛結婚で、若干の周囲の反対を押し切って三年ほど前に結婚した。金英は七つ年下の二五歳である。夫婦喧嘩はたまにしても、琴瑟の乱れる程ではない。いつも、仲睦まじくしていた。『聊齋志異』「画皮」では、王生夫妻の年齢も、結婚したいきさつも何もかかれない。妻の名も陳氏から金英へと変更されている。また、王生が家に連れてくる女には愛蘭、道士には黄道士という名前が付されている。この名前は、「創作ノート」執筆時から書かれているので、創作の初期段階から決めていたのであろう。妻の名に、黄金のイメージを付していることは重要である。

「糞尿譚」の「第二章」では、王生が女に逢う数日前に、王生

が糞だらけになって戻ってくるシーンがある。そして、王生と糞男との出会いが詳しく書かれるのである。百姓が肥料に蓄えた糞壷に浸かっている糞男は、王生を「やあい、王生小学の鼻下長のぼんやり」と罵しった。この糞男は次のように、説明される。

太原で、この狂人乞食の本名を知つている者はたれもない。無論、身よりも全然ない様子で、素性も知れない。いつも糞や小便のなかに平気で横たわっているので、ただこれを見る者は、糞と呼んでいる。糞の年齢もわかりにくい。顔が髭のなかにあるように、あらゆる部分に毛が生えている。そして、その顔は百歳の老人のように見えるかと思うと、五十位に見えたり、ときに、青年のようであつたり、まれには、小児のような童顔にもなることがある。[9]

糞とよばれるその男は、年齢、素性不詳であり、続いて「いつも念仏のように、同じことをとなえている」とある。その念仏のような文句をとなえる場面は、次のように記される。

『寿限無寿限無五劫の摺りきり、海砂利水魚の水行末、雲来末風来末、食う寝る所に住む所、やぶら小路のぶら小路、ぱいぽぱいぽ、ぱいぽのしゆうりん丸、しゆうりん丸のぐうりんだい、ぐうりんだいのぽんぽこぴいのぽんぽこなの長久命の長助』という言葉を繰返しているのである。乞食といつても、たれも寄りつかぬから、門ごとに喜捨を乞うときには、無断でつかつかと厠にまわり、便所の糞尿を手づかみにして、食つたり飲んだりするだけだ。[10]

念仏のような言葉は、お馴染みの落語「寿限無」の子供の長い名前である。全て、永く限りなくめでたいものを並べた語句であり、年齢不詳の糞男の話しそうな意味不明の台詞である。「創作ノート」には、「糞（綽名）仙乞食　ジユゲム〳〵ヲトナヘテ糞ヲマキチラシテイル仙人」とある。火野は、「創作ノート」を記した時点で、糞男に「寿限無」を唱えさせようと考案していた。そして、この男、ただの糞男ではなく仙人なのである。ちなみに、「寿限無」は、芥川賞受賞に輝いた「糞尿譚」の主人公で、糞尿汲み取り業の彦太郎も唱えていた。芥川賞の「糞尿譚」と同一モチーフを使っているのである。『聊斎志異』「画皮」では、糞男は、こんな念仏は唱えていないし、最後に登場するのみであり、出会いの場面は描かれない。火野は、最後に

登場する糞仙人を、「糞尿譚」では、最初と最後の二度登場させ、糞尿話に相応しいように改変したのである。

王生が糞男に初めて会った時、糞男は、女房が浮気しているのを「鼻下長のぼんやり」だから、知らないと罵ったのであった。しかも、その糞男は、浮気相手は自分だと言う。王生は、糞だらけの男に自分の女房が「首つたけ」なんて、なんとも馬鹿馬鹿しいと笑いこけた。しまいに、腹が立って糞壷に石を投げ入れ、糞男から糞だらけの雨を浴びせられてしまったのであった。このシーンは、最後に登場する糞男と妻のやり取りを暗示させる伏線になっている。王生の妻は、帰宅した糞だらけの王生を見て驚き、訳を尋ねるが、亭主の王生は、「糞狂に女房ののろけをいつて、糞をかけられた」と言うことを素直に口には出せず、本を読んでいて足を踏み外したと答える。女房の金英には、「あんた、助平だから、どこかの女にでも見とれていて、糞壷にでも落ちこんだんでしよ」と言われてしまう。ここで、「糞尿譚」では、王生の心理を語り手が次のように記す。

亭主はいつでも女房に優越感をもつていたい気持がぬけないから、よそに行つては、手ばなしで女房ののろけをいうことはあつても、家にかえると、お前なんか問題でないという顔をするのである。（中略）人間はどんな土壇場でも、虚栄心と自尊心とはうしなわないものだから、このときも、王生はその人間の法則にしたがつた。[11]

語り手は、「人間の法則」つまり、人間とはこんなものだという見解を述べるのである。続けて語り手は、女房は「亭主の態度によつて、夫が外でなにをしたかを、ぴいんと悟る」恐ろしい「神通力」というものを持っているが、それがいつも適中するとは限らないが、妻は「自分のかんに誤りはないと信じている」のであると述べる。語り手、つまり筆者である火野は、男女の微妙な心理をよくとらえた人間通と言えるであろう。火野は、「オンテレ・メンピン女房学」[12]で、「女は幻覚をつくりだすことの名人」と述べ、火野が東京で浮気をしているという根も葉もない噂に火野の女房が惑わされ、早朝、突然東京の書斎「鈍魚庵」にやってきて「部屋の中を素知らぬ顔で点検した」という実話のエピソードを紹介している。火野は、このような体験から、こんな見解を妻に対して持っているのであろうか。

c　妻（「糞尿譚」では金英）の女（「糞尿譚」では愛蘭）への嫉妬

愛蘭を王生の書斎に連れてきて、暮らしはじめると、妻金英が女（愛蘭）に対して嫉妬する。その様子が火野の「糞尿譚」では、王生と愛蘭との会話から見られる。それらは「四章」に描かれる。

「あの女を見るときは、とろんと、瀬に打ちあげられてのびた魚みたいな眼してるわ。（中略）愛蘭さんの部屋ばつかり行つてるじやないの」

「そう疑つてばかりいちや、話にならん。愛蘭さんを一室に監禁したみたいで、ほつとくわけにもいかんじやないか。（中略）そんなに、お前がいうなら、お前が愛蘭さんの相手をしてあげればいいじやないか」

「たれが、あんたの惚れてる女なんかの機嫌とるもんか」

「惚れてなんか、いやせんよ」

「あんたも心臓ね、いつそんなに、図々しくなつたの？妾を女房のいる本宅にひきこむなんて」

「おいおい」[13]

『聊斎志異』「画皮」よりは、ずっと登場人物の心理描写が増えていて、リアリティーが感じられる。また、語り手は、続けて次のように記す。

しばしば、愛蘭の部屋に、二人きりでいることはあつたが、二人がなにをしたかは、筆者もよく知つていない。ここのところを、肉体派の作家なら、ふんだんに思わせぶりのエロチズムをふりまきながら、煽情的に描写するところであろうが、筆者は野暮であるから、密室の場面については、女房たる金英のためにも、叙述を省いておこう。[14]

火野は、自分は、肉体派の作家ではないことを強調するのである。火野は、この「糞尿譚」が「中国糞尿譚」と改題されて収録されている『いろといのち』の「まえがき」で、「神聖にしておかすべからざる男女の関係も、考えよう、あつかいようでは、みだらがましく、汚くなり、罪のもとになる。ただ助平たらしい春本や、エロばなしに堕しては、見るにも読むにも耐えない」[15]と記している。「糞尿譚」執筆時の昭和二五年頃は、性の解放の時代とも言われていて、エロ・グロ、浮気などをあつかったカストリ雑誌などが大流行していた。[16]火野は、このような

風紀の乱れた戦後風俗文化を嫌悪していた。文化の低下を危惧していたのである。火野は、ほぼ「糞尿譚」と同時代に書いた『悲恋』の「あとがき」で「肉体を過信することは危険である。肉体は思考などしない。精神の高貴が追及されなくては肉体は腐死である。エロチシズムは正しく文学のなかに生かされなくてはならないが、エロチシズムのみが文学となり得ることはできない[17]」と述べる。精神の尊さをあっての肉体なのである。そこで、「糞尿譚」では、男女の恋愛問題をテーマにしながら、単なる「エロばなし」とならないような配慮をして創作している。猥褻風俗小説にしたくはなかったのであった。語り手は「糞尿譚」で、もともと女は一二本の角を持っていると記す。続けて

女がこの十二本を全部出しきるときは、世界の終りである。金英は、王生が妙な女をつれこんできたことに、機嫌を損じて、小出しに四本だけの角を生やした。しかし、これは、王生のためによろこぶべきことなのだ。女房がやき餅を焼かなくなり、亭主がどこでなにをしても、なにもいわなくなつたら、気をつけねばならない。そのときこそ夫がやるのなら、こつちもやるとい浮気競争の危険が近づいているか、すでにはじまつているかのどつちかだからだ。[18]

火野は先にあげた「創作ノート」に、「〇女房ガヤキモチヤカナクナルト、気味ガワルイ、亭主ハ気ヲツケナクテハイケナイ、アンタガヤルナラ、コツチモヤルトイフツモリカモシレン」と語り手と同様の言葉を記している。「糞尿譚」構想の初期段階で、重要ポイントは夫婦間の愛情であると決めていたのであろう。

d　女（「糞尿譚」では愛蘭）の正体を知るまで

『聊齋志異』「画皮」では、女を書斎に匿った後、次のようにストーリーが展開する。

ある日、町に出て行って王生は道士に出会う。道士は王生を見て驚愕し、王生の身体には邪気が取り巻いている、何かあったのかと問うた。しかし、王生が何ともないと言うので、道士は、王生は邪気に惑わされていて、死期が近づいても悟ることができないと言った。王生も道士の言うことが気になって、女を疑ったが、あれ程の美人に何の不思議があるだろうか、道士が祈祷料欲しさにでまかせをいっているに違いないと思った。書斎に戻ると、中から鍵が掛かっていて入れない。不審に思いながら、垣根のくずれを乗り越えると、部屋の戸も閉まってい

た。忍び足で窓から覗くと、青い顔で鋸のように尖った歯をむき出した鬼が、寝台の上に人間の皮を敷き、筆で絵を描いていた。書き終わると皮を被った。すると、鬼はあの美人の女になったのである。王生は驚愕し、恐ろしくなって腰を抜かして這うようにして逃げ、道士を捜したが見当たらなかった。あちこち探し、野原で見つけた。跪いて王生は道士に救いを求めた。道士は、鬼も王生という代わりの獲物を見つけるために大層苦しんだのだから、殺さずに追い払ってあげようと言い、払子を授け、寝室の入口に掛けておくように命じた。そして、道士と王生は、今度は青帝で会おうと約束して別れた。王生は、自宅に帰り、書斎には入らず、入口に払子を掛けて妻の部屋で寝た。八時頃、戸の外で妙な音が聞こえた。王生は自分で覗かず妻に覗かせた。女がやって来たが、入口の払子を見て進むことができず、立って歯ぎしりをし、やがて去った。

「糞尿譚」でもほぼ同様に展開する。ただし、「糞尿譚」では、語り手が、「あの絶世の美女の正体が、鬼とわかっては、もはや王生に浮気心など、仁丹粒ほどもあろう筈はない。瞬間に霧散雲消してしまった（中略）いまは悔恨の念が先に立つばかり」と王生の心理を描写する。このような心理描写は、『聊斎志異』「画皮」にはない。そして、語り手は「王生の邪心が、女の本体を知ることで覚醒したのだ。いつでも人間は堕ちてみなければわからないような滑稽な資質なのである」とコメントする。火野葦平は、戦後「人間は滑稽動物である」[19]ということを何度も記す。「糞尿譚」は、火野が公職追放中に書かれた作品である。火野は、戦時中は、陣中での芥川賞受賞、その後、兵隊三部作がミリオンセラーとなり、大流行作家となってもてはやされた。戦後は、一転、戦争に協力したという理由で公職追放を受ける。日本の歩んだ侵略戦争の時代、ちょうど、青年期だった葦平が巻き込まれたのであるが、公職追放を受けたことは、戦前の華やかな時期に比べ、やはり彼にとって大きな打撃であっただろう。その時に、何故、日本は、そして世界各国は戦争を起こしたのかを自問自答した。火野の戦後の出発は、戦争などという馬鹿げたことをしてしまう人間とは何かを追及することではじまった。そして、人間は、理屈でわかっていても、馬鹿げたことをしてしまう「滑稽動物」であるというところに辿り着く。火野は次のように述べている。

> 終戦直後、私は追放をうけて、しばらくペンをしばられていた時期があつた。執筆禁止ではなかつたが、内容を制約されたため、私は窮して、救いを「聊斎志異」に求めた。

そして、柴田氏版を参酌しながら、自分流に勝手に書きあらためた「私版聊齋志異」物語を時折ものにした。二年ほど後、追放を解除されたときには、それが十篇ほどもたまつていて、私の頭上にあつたときに、いかに「聊齋志異」がよき友であつたのかと感謝の念がおさえがたいのである。[20]

火野は、孤独の中で『聊齋志異』に救いを求め、人間とは何かを追及していったのであった。

さて、「糞尿譚」では、愛蘭が鬼だと知った王生は、妻に、素直に「すまなかつたな」と謝り、金英も「いいのよ」と許した。夫婦愛をテーマとした「糞尿譚」では、『聊齋志異』「画皮」にはない、語り手の次の言葉が描かれる。

ちよつとした浮気のあとでは、夫婦の結合は、さらに濃やかになる。永い夫婦生活においては、適度の夫婦喧嘩がその倦怠の潤滑油になると、私が前述したとおりである。浮気の効用というものも、まんざら棄てたものではない。ただ、これを最初から計画的にやると、しばしば失敗することがあつて、あとの後悔先に立たずということがおこる。そこが人間と人生の微妙で、面倒くさくて、手に負えなくて、そして、面白いところである。[21]

語り手は、夫婦生活を知り尽くしたような見解を述べる。是永勉は、「火野さんは愛妻家だと思う。むしろ恐妻家に近いようにも思われる」[22]というが、火野は妻の心情をよく心得、いつも、夫婦円満になるように考えていたのかもしれない。

ここで、「糞尿譚」の特徴を見てみよう。王生が道士に貰った払子の色は、白で、鬼の顔は「草色に燃え」、そして、口は耳元まで「西瓜の半片」のように開き、鋸のような「ぎざぎざの歯なみが灰色」であると形容されている。また、鬼の「らんらんと光る眼は、憎悪と怒りのいろを火の粉のごとく散らせて」と、臨場感あふれる様が描かれる。実に色彩表現や、比喩表現が見事である。このような、色彩鮮やかな表現は、『聊齋志異』「画皮」には全くない。火野は、「画皮」をもとにしながらも、自分なりに加筆修正をし、新たな作品に仕上げているのである。色彩および比喩表現は大きな特徴となっており、より詳しく後述する。その後、「画皮」は次のように展開する。

いったん去ったかに見えた鬼は、暫くするとまたやって来て、道士は私を嚇かしているがそうはいかない。一旦口に入れた獲物をはき出してたまるか。と罵り、払子を掴んで引き裂くと、

戸を壊して中に入った。そして王の腹を引き裂き、心臓をとって去っていった。妻が泣き叫んだので腰元が駆けつけた。灯りで照らすと部屋は血の海となり、王は既に死んでいた。陳氏は驚き悲しんで言葉を失い、ただ涙を流すばかりであった。翌日、弟の二郎がことの顚末を道士に伝えた。道士は、哀れんで見逃してやろうと思ったのに、こんなひどいことをするとはと激怒した。そして、二郎に案内されて、王生の家に来た。道士は、化物は南の離れの二郎の家にいると言った。二郎は仰天したが、自分の留守の間に下働きに雇ってほしいと頼みに来た老婆が化物だとわかった。妻は老婆を留めていた。道士は庭の真ん中に立ち、木剣で地面を叩きながら大声で払子を返せと叫んだ。すると老婆は顔色を変え、門を出て逃げようとした。道士が追いかけて木剣で撃つと老婆は倒れた。と同時に、人間の皮が剥がれて恐ろしい鬼の姿が現れ、倒れたまま豚のように吠えた。道士が木剣で鬼の首を切ると、身体は濃い煙となって地を這った。道士はその煙を袋につめ、立ち去って行こうとした。

「糞尿譚」に戻ろう。金英は「夫が涙ながらにもの語る懺悔の言葉で、天にのぼったような幸福感をおぼえ、これまで嘗てないような愛情のわくのをおさえがたくなって、夫が悲鳴をあげるほどはげしく愛撫」する。しかし、この金英の感激はほんの束の間で、『聊齋志異』「画皮」と同様に、鬼は王生の心臓をくり抜き、黄道士に退治され、袋に詰められるのであった。

e　鬼が退治された後

『聊齋志異』「画皮」では、鬼が袋詰めされた後、妻の陳氏が道士に起死回生の法を願い出る。道士は、自分にはとてもできないと断った。しかし、陳氏が慟哭するので、糞土の中で寝る糞乞食男なら起死回生ができるかもしれないと紹介してくれた。その糞男は、三尺も鼻水を垂らし、意味の解らぬ歌を怒鳴っていた。道士は、糞男は陳氏に無礼なことをすると思うが、決して立腹してはいけないと諭した。陳氏は跪いて糞男に近づいた。糞男は、自分に惚れているのか、自分が愛しいのかと問うた。陳氏が夫の再生を頼むと、自分を生死を司ることのできる閻魔大王とでも勘違いしているのかと、持っている杖で陳氏を撃った。陳氏はそれでも耐えていた。やじうまが大勢それを見ていた。しまいに、糞男は、手のひらに痰を吐きそれを、陳氏に差し出して呑み込めと命じる。陳氏はさすがに、迷惑そうにしたが、結局辛抱して飲んだ。それは、綿のかたまりのようで胸のところに留まった。

「糞尿譚」でも、物語の骨子は同様である。だが、鬼退治をしてくれた黄道士に王生の弟二郎が厚く礼を述べ、感謝の気持ちを表明するにもかかわらず、妻金英は、「お恨み申しあげます」と述べる。黄道士は呆気にとられた。『聊斎志異』「画皮」では、王生が心臓を抉り取られて死んだ後、妻が泣きやまないとだけあったが、鬼退治をしただけで感謝されると考えている黄道士の心理を、火野は「糞尿譚」では次のように語り手に描かせる。

黄道士はあたかもわが国の政治家なるものに似ている。かれにとつては、自己の技術、自己の名声の方が大切なのであつて、政治を必要としている庶民の生活などということはどうでもよいのである。どうでもよくないように振舞つているときは、ただ、だしにしているだけだ。黄道士は王生に災をなした沈鬼をたおしたことで、自分はすこぶる満足し、自己の名声のさらに高まる期待で、胸ふくらむ思いであつたので、当の本人たる金英の嘆きのことなどに、深く考えが及ばなかつた。金英がこの復讐にたいして、一向にありがたそうにしないので、若干不服の気持ちがあつたくらいである。(23)

火野は、黄道士が自分独りよがりで満足する様を、その時代の政治家になぞらえ、批判をしている。実に興味深い。黄道士に、わしは「魚屋や、政治家のように、生きた者を殺すのは得意です」と言わせている場面もある。単に「糞尿譚」は、『聊斎志異』を改変しただけの作品に一見見えるが、そこには火野の深い洞察が込められている。時代や政治に翻弄されることなく、人のために尽くす政治を、アジア太平洋戦争に駆り出され、公職追放にまで受けた火野だからこそ、一層切望したのであろう。戦争に駆り出されたことも、公職追放を受けねばならない事態になったのも、政治家の責任でもあることを、暗にほのめかしているのかもしれない。客観的に冷静に時代をとらえ、政治家も一人合点をして「生きた者を殺す」などという間違った方向に進まないように、国民の声に耳を傾ける姿勢が必要なのである。

さて、「糞尿譚」では、黄道士は、金英に、沈鬼に憑かれて助かった者はいないので、いずれは王生は命をとられる運命だったはずだと言うが、金英は、黄道士が払子を王生に渡したために殺されてしまったのだと黄道士を責めた。そこでは、語り手は、

女性は理論の飛躍を得意とする。自分の尺度にいったんはめこむと、その主張は横車的になっても、あくまで引き下がらない。道士もそれに気づいて、これは理論闘争をしても無駄だと観念した。同時に、その横車をおさせる金英の悲しみの所在にも、はじめて気づいたのである。[24]

火野の作品に登場する語り手は、イコール筆者、つまり火野葦平であることが多い。そして、しばしば、独自の偏見をともなった女性観[25]を展開する。明治三九年生まれの葦平にとって、女性への偏見があることは仕方ないであろう。火野の女性観が当たっているか否かはともかくとして、金英の王生に対する愛情が『聊齋志異』「画皮」より一層クローズアップされるところが重要である。「画皮」では、金英が黄道士を責める描写もない。

こうして、金英は、糞男のいる、青帝廟に行く。糞男は、「糞尿譚」では『聊齋志異』「画皮」よりも一層汚く描写される。糞壷の中に横たわり、糞土まみれだけでなく、頭、顔、胸、表面のあらゆる部分に蛆がわいていることにしているのである。そして、さらに、金英と糞男とのやりとりが、会話文を駆使して次のように記される。

『お願い申します。わたくしは、もう、夫なくしては、生きている甲斐もございませぬ。不憫と思し召されて、もう一度、わたくしに、王生をお恵み下さいまし。(後略)』

金英は、必死に、手をもみあわせ、糞中の糞を拝んだ。

『ふん、勝手な女子ども奴、申すことは、どいつもこいつも同じじゃな。夫一人の、恋人だけが生き甲斐のつて、口先ばかり、そのときばかり、男が死んで、一周忌も、四十九日も来ぬうちに、もう情人をこしらえてやがる。(中略)一緒になるときにや、死ぬの生きるのと騒いだ奴が、みなそれじゃ。(中略)お前さんくらいの器量なら、男に困りはせん。それに、助平たらしい顔しとるから、大金持か、代議士か、新興成金か、そんな奴から、妾にたのみにも来ようわ。なにも、死んだ王生なんて、生きかえらせんでも、ええじゃないか』

『そんなこと、おつしやらずに、どうぞ、あたくしに、夫を……[26]』

ここの、糞男のせりふと重なる言葉が、「創作ノート」に、「○恋愛結婚、一緒ニナルトキハ死ヌノ生キルノトイツテオイテ、アトハケロリ○死ンダガ最後、初七日モスマヌウチニ再婚スル

ノガ多イ」と記されている。この糞男の発言は、創作上重要なのである。一般的な男女の多くが、また、夫婦が、それほど一途にお互いを思うことはないとしても、金英はそうではないことを記したかったのであろう。金英は、糞壷に近づき、額に糞がこびりついても何度も哀願した。金英にとっては、汚さも臭気も問題ではなかった。しつこく頼むので糞男はついに怒り、激しく金英を打ち続け、「ポンプで水をかけるように、金英に糞尿の球を浴びせた」。王生が糞男に最初に会ったとき、王生も同じように糞の雨をかけられた。夫婦共に糞男に糞をかけられたのである。そして、大勢の野次馬の見守る中、ついに、糞男の吐いた痰の塊を飲まされたのであった。語り手は、

この耐ゆべからざる屈辱と、侮辱と、苦痛とを耐えさせているものは、たしかに夫への愛であつた。愛におそれなく、愛に敵なく、愛の確信に天もうごいたことのあるのは、聖書のつとに説いたところである。(17)

と述べる。このように、金英の、夫へのいつまでも変わらない真実の愛情を強調するのである。

f　ラストシーン

妻が糞男に痰を飲まされた後、『聊斎志異』「画皮」では、糞男は「どうじゃ、別嬪さまが、わしがすきじゃとさ！」と笑いながら消えていった。妻陳氏は、糞男を尾行してとある廟に入るが、見失い、やむを得ず帰宅した。糞男の痰を飲まされた恥辱を思い、絶望し、いっそ死んだ方がましだとまで思いつめた。夫の遺体の血汐の汚れを拭いて清め、露出していた内臓を体内に収めた。陳氏は、泣声が枯れ、突然胸元に滞った塊を夫の胴体の中に吐いた。それは温かい心臓であった。陳氏は、心臓を夫の体内にしまい、両手で傷口を合わせた。包帯をして絹布団で覆ってやると、だんだんと夫に体温が戻った。夜半には夫は呼吸をし、夜明けには甦って、何だか心臓のあたりがしくしく痛むが、夢のようだと言う。傷跡は、銭ほどのかさぶたであったが、やがてそれも治っていった。

「糞尿譚」でも、糞男は、金英に、掌中一杯の痰を飲ませ、「今が見どころ、近来にない見世物じゃ。この別嬪が、わしに惚れて、これこの通りじゃ。銭は要らん、よう見て置け。笑うてやれ」と見物人に呼びかけた。その後の展開は、若干『聊斎志異』「画皮」とは異なる。糞男は、金英のような「馬鹿に相手になつ

ていては、切りがない」という捨て台詞を残して糞壷に潜ってしまった。金英は、夫を生き返らせて欲しい一心で、後を追い、糞壷に飛び込んだ。金英の姿はたちまち表面から消え、「黄金の泡が、錬金術の坩堝のように湧きたつ」。見物人は、

『日本の作家の火野葦平というのが、「糞尿譚」という小説をかいとるが、あれどころじゃないな』

『糞に溺れたら、じき死ぬぞ』[28]

などと言って見ていた。金英はやがて、がっかりした様子で壺から這い上がってくる。その様子は「あたかも金無垢のよう」であった。

さて、先に、この「糞尿譚」では、色彩表現や比喩表現が特徴的であることを指摘した。注意すべきは、糞だらけとなった金英を「金無垢」のようだと形容し、糞に気高いプラスイメージを与えていることである。ラストシーンでは、より一層色彩表現がきわだっている。例えば、糞男のいる青帝廟は、「五色の宝珠の光る五重塔」で、「陽に映え」、「鳩が廟の青磁色の屋根に、雲を散らすようにむらがり舞つている」とある。糞男のいる場所は、いかにも高貴な場所である。作品中には、糞男は、糞と書かれているが、火野は「創作ノート」には、「糞ヲマキチラシテイル仙人」と記している。つまり、糞尿をまき散らしているが、糞男は、神仙の尊いもので、糞壷は黄金を生み出す壷であり、彼の撒く糞それ自体は黄金とされる。『聊齋志異』の「画皮」では、青帝廟も、言葉のみが出てくるだけであり、糞も黄金とは形容されていない。「糞尿譚」ラストシーンでは、汚ない糞が限りなく美しく、尊いものと描かれるのである。

ここで、芥川賞受賞作の「糞尿譚」を思い出してみたい。芥川賞の「糞尿譚」で、主人公の彦太郎は、この「糞尿譚」の糞男と同様に、「寿限無」を唱え、「馬鹿」と形容されていることは、先に指摘した通りである。その彦太郎が、自分を馬鹿にして勝手なことをしていた人々に柄杓で、糞尿をぶっかけて、撒き散らし「もう俺は弱虫ではないぞ、馬鹿ではないぞ」と叫び「寿限無」を唱えながら、「さあ、誰でも来い、負けるもんか」と、言う。そして、

彦太郎がさんさんと降り来る糞尿の中にすつくと立ちはだかり、昂然と絶叫するさまは、ここに彦太郎は恰も一匹の黄金の鬼と化したごとくであつた。折から、佐原山の松林の蔭に没しはじめた夕陽が、赤い光をま横からさしかけ、

つつ立っている彦太郎の姿は、燦然と光り輝いた。[29]

この描写で、作品は幕を閉じる。芥川賞の「糞尿譚」は、弱者であった彦太郎が勇気を出して立ち上がり、敵に立ち向かって勝利する。それを、たたえるかのように、ラストシーンでは、黄金の糞尿と、夕陽が輝くのである。馬鹿と天才は紙一重であると言われるが、火野は、馬鹿とされる人物、彦太郎を糞尿汲み取り業という設定にし、「寿限無」を唱えさせ、弱者を救う力を授けた。つまり、神的な強い能力である。太宰治の「人間失格」[30]に登場する一見知能が劣っているとされる白痴の竹一が、葉蔵の本質を見抜き、未来を予言する神的力を備えているところと相通ずるものがある。そして、本稿の「糞尿譚」では、糞男は神仙のもので、王生を蘇らせる神通力を持っていた。本稿の「糞尿譚」は次のように話が進む。

金英は、糞男を見失い、絶望的になり、死のうと決めるが、『聊齋志異』の「画皮」と同様、王生のはみ出した内臓を、身体におさめた。涙は枯れて金英の忍耐は極限に達した。語り手は金英の心理を、

いかなるものにも限度があるように、忍耐にも限度がある。ないというのは、形而上学者のロマンチシズムだ。或はアテネの詭弁派にすぎない。ただ、限度を考えたり、計つたりしない精神が尊いのである。金英は、このとき、もはや忍耐という言葉すら、頭にうかんでいなかった。全力を尽くしただけだ。そうして、敗北した。[31]

と述べる。金英は、絶望のどん底につき落とされ、夫の遺体を整えている時、『聊齋志異』の「画皮」と同様、嘔吐した。夫の体内に落ちた嘔吐物は、鬼にとられた心臓で、次第に夫は温かくなり、金英は傷口を縫い合わせた。蒲団をかぶせると呼吸が漏れ、夫は生き返ったのであった。不思議なことに、金英の身体からは、糞尿は消え去り、えも言えぬ芳香が漂っていた。『聊齋志異』の「画皮」よりも、王生が蘇生する時間は短く、そして、火野は金英に、心地よい香りをつけたのである。『聊齋志異』の「画皮」では記されていないが、「限度を考えたり、計つたりしない精神」が功を奏して報われ、夫が生き返ったことに理由を加筆して改作している。

「糞尿譚」の最終場面は、『聊齋志異』の「画皮」には存在しない、王生が便所に入ったままなかなか出てこないシーンが描かれる。

「あなた」
「うん」
「まだ、うんこしてるの？」
「おかしいんだよ。いくら出しても出しても、出るんだよ」[32]

二時間後、王生はようやく便所から出る。最後は、笑い話のような終わり方であるが、糞尿を強調した結びとなっている。『聊齋志異』「画皮」では、鬼が皮に画を書いて、それを被って美女になり、男をたぶらかし、獲物にする。その鬼の皮「画皮」がタイトルとなっていた。鬼の恐ろしさに重点を置いている。一方「糞尿譚」へと題名を改めた本作は、あくまで、糞尿を讃え、象徴する終わり方である。「創作ノート」には、「〇人間は糞尿製造器である。糞仙人は人間の原型の象徴」ともある。火野葦平は、糞尿する姿に、人間の原点を見出していたのであろう。

終りに

本稿では、火野葦平が、『聊齋志異』「画皮」を元に加筆、改作して発表した、二作目の、小説「糞尿譚」を考察してきた。火野が、登場人物の心理描写をうまく記していること、糞に黄金のイメージを与え、高貴なものとするなど、色彩描写の上手さや重要性などを指摘した。「糞尿譚」では、金英の「限度を考えたり、計つたりしない精神」つまり、損得勘定にとらわれない犠牲的精神が賛美されていた。金英は、最初は敗北する。しかし、その自己犠牲の美しい心は、神に届いたのである。

火野葦平は、戦争中に記した『戰友に想ふ』[33]の中で、兵士の姿を「泥濘と山岳と黄塵の中をのたうち、食もなく、水もなく、家もなき生活の中に生きて来た」そして、「それらの譬へやうなき苦難の中に」、兵隊は鍛錬され、苦難を克服し、「如何なる苦難にも堪え得る人間に成長した」と記した。そして、兵隊は「人間として最も尊いもの、大切なもの、平和の時にはあらゆる手段を講じて護り育てて来たもの、何よりも惜しいものを投げだしてゐる」と述べる。現地に行って戦わされた兵隊達は、祖国や、家族の愛のために、自己の命を犠牲にして任務を全うしたのであった。その兵隊の精神は、「糞尿譚」の金英に通じるところがある。

政治家上層部、軍上層部の間違った占領政策は、確かにあやまりである。そして、戦争に自己犠牲の精神を用いても、意味がない。日本は敗北し、戦争に行かされた人々は、戦後、悪者

扱いとなった。火野も長きの従軍が災いし、戦後、文化戦犯として公職追放を受けることになった。火野は、公職追放中、社会から四面楚歌状態であった。その時に、早稲田大学在学中に読んだ『聊齋志異』に救いを求め、神仙と、人間のやりとりから、人間というものは何かを考えていった。そして、『聊齋志異』の言外の意味を汲み取り、新たに創造し、「糞尿譚」という作品を生み出した。そうして、何度も悩みながら、人間の原点には、糞尿と自己犠牲の究極の愛の世界があることに辿り着いたのである。兵隊達の、祖国を愛する気持ちや、他人のために懸命に働く尊い愛の精神は、やはり、美しい。それは、黄金に匹敵するもので、戦後も、十分生かすことができると考えたのではないか。語り手の「愛におそれなく、愛に敵なく」ただ愛に確信だけがあるのみという言葉が心に沁みるのである。

火野は、「美しいということ」というエッセイの中で、「人間は『黄金の袋にボロをつつむのではなく、ボロの袋に黄金をつつんでいなければならない』ということである」[34]と述べる。「糞尿譚」の金英は、糞まみれになっても、真実の愛を貫く美しい精神を持っていた。「滑稽動物」である人間は、とかく間違ったことを行いがちである。しかし、人間の原点である愛の姿に立ち返ることで、危機を救い、戦後の復興や世界平和に向けて出発できると考えていたのであろう。

〔注〕

(1) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』昭和二五年二月一日)三一四～三三三頁

(2) 『東洋艶笑滑稽聚』(昭和二七年五月三〇日、東京文庫)収録の際に、中国糞尿譚と改められた。

(3) 火野葦平「インド糞尿譚」(『別冊小説新潮』昭和三二年一〇月一五日)二八～三八頁

(4) 火野葦平の公職追放とは、昭和二三年六月二五日から二五年一〇月一三日までである。

(5) 火野葦平「糞尿譚」(『河童会議』昭和三三年四月一〇日、文藝春秋新社)八一頁

(6) 火野葦平「あとがき」(『美女と妖怪―私版　聊齋志異』(昭和三〇年七月一日、学風書院)二七六～二七七頁

(7) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三一六頁

(8) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二〇頁

(9) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三一七頁

(10) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三一七頁

(11) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三一八頁

(12) 火野葦平「オンテレ・メンピン女房学」(『女房学・亭主学』昭和二八年一二月一日、特集文庫第二号、自由国民社)二九頁
(13) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二一頁
(14) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二一～三二二頁
(15) 『いろといのち』同、一頁
(16) 福島鋳郎「カストリ雑誌」(佐々木毅・正村公宏・村上陽一郎編著『戦後史大事典　増補改訂版』(平成一七年七月一五日、三省堂)一二三頁
(17) 火野葦平「あとがき」(『悲恋』(昭和二四年七月一五日、洋元書房)二五八～二五九頁
(18) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二二頁
(19) 火野葦平『赤い国の旅人』(昭和三〇年一二月二五日、朝日新聞社)などにも書かれる。
(20) 火野葦平「三十年愛読の書」(『底本聊斎志異月報三』昭和三〇年八月三〇日、修道社)七頁
(21) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二六頁
(22) 劉寒吉・小田雅彦編『花冊集』(昭和三〇年五月一日、河伯堂)収録　八八頁
(23) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二八頁
(24) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三二九頁
(25) 例えば、「鶯鵡変化」(『オール読物』昭和二五年四月一日)では、「女の運命と全生活とは、つまり、幸福と不幸とは、顔の美醜にかかわっているといってよい」などと記す。
(26) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三三〇～三三一頁
(27) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三三一頁
(28) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三三二頁
(29) 火野葦平「糞尿譚」(『火野葦平選集　第一巻』収録、昭和三三年五月三一日、創元社)四八頁
(30) 太宰治『人間失格』(昭和二三年七月一日、筑摩書房)
(31) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三三二頁
(32) 火野葦平「糞尿譚」(『キング』)同、三三三頁
(33) 火野葦平『戦友に愬ふ』(昭和一四年一二月一日、軍事思想普及会)
(34) 火野葦平「美しいということ〈若い河〉」(『週刊読売』昭和二三年六月二九日)二〇頁

本稿は、科研費補助金(課題番号02620002)の助成を受けました。また、火野葦平の「創作ノート」掲載に関しては、玉井史太郎様に大変お世話になりました。深く御礼

申し上げます。

（ますだ　ちかこ／本学教授）